

# 英語の接尾辞-able について：

## 語彙意味論と統語論の関係を探る\*

神谷昇

神田外語大学言語科学研究センター

本稿は、動詞に接尾辞-able を付加することにより派生される形容詞（-able 形容詞）に課せられる制限を語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure)と項構造(Argument Structure)の観点から分析し、その派生には事象の抑圧(Kageyema (2002))と事象の卓越化が関与していることを提案する。また、-able 形容詞の統語構造についても検討し、-able の統語構造における位置はそのクラスと密接なかかわりがあることを論ずる。最後に、語彙意味論的分析と統語的分析を統合し、LCS と統語構造の関係について検討を行う。

### 1. はじめに

本稿では、(1)に示すような動詞に接尾辞-able（および、その異形態である-ible）が付加した語（以下では「-able 形容詞」と呼ぶことにする）を取り上げ、それらの語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure; LCS)、項構造(Argument Structure; AS)、統語構造を検討する。

---

\* 本稿は、Morphology and Lexicon Forum 2005（於関西学院大学）での口頭発表の内容を修正、発展させたものである。本稿を執筆するにあたり、中島平三先生、高見健一先生、長谷川宏先生、長谷部郁子氏から助言を頂いた。また、Morphology and Lexicon Forum 2005 の参加者からも有益なコメントを頂いた。さらに、Sean O'Rourke 氏にはインフォーマントとしてお世話になった。ここに記して感謝の意を表したい。言うまでもなく、本稿における不備は筆者によるものである。

(1) (un)believable, breakable, readable, reducible, washable

より具体的には、動詞的受身形と-able 形容詞との間に観察される類似点や相違点について考察し、LCS と AS の観点からそれらに対する分析を提示する。特に、-able 形容詞の派生には Kageyama (2002)の提案する事象の抑圧(event suppression)が LCS で関与していること、また、接尾辞-able は LCS の事象の一部を卓越化し、その事象に属する項が AS に投射されることを提案する。さらに、-able 形容詞の統語構造を Kamiya (2002)の観点から分析し、-able の形態的なクラス(Aronoff (1976))と統語構造における位置が密接に関連していることを議論する。そして、本稿で提案する LCS に基づいた分析、および統語的分析を統合し、LCS と統語構造（さらには音韻部門）との関係を明らかにしたい。

本稿の構成は以下の通りである。2 節では、動詞的受身形と-able 形容詞の類似点と相違点を考察する。3 節では、接辞-able は 2 つのクラス(I 類、II 類)に分類できることを示した上で、それがどのように項の継承に関与するのかを、LCS と AS を用いて分析する。4 節では、3 節で示した分析の更なる帰結を提示する。5 節では-able 形容詞の統語的分析を提示する。6 節では、3 節と 5 節で提案した分析に基づき、LCS と統語構造と音韻部門の関係を議論する。そして、7 節でまとめを行う。

## 2. -able 形容詞に課せられる制約

本節では、動詞的受身形と-able 形容詞の比較を行い、両者の類似点と相違点を明らかにする。

まず、-able 形容詞は動詞的受身形と同様に、受身的解釈を

持つ(Quirk et. al. (1985))。<sup>1</sup> したがって、(2a)は(2b)のように言い換えることができる。

- (2) a. The text is untranslatable.  
b. The text cannot be translated.

(Quirk et. al. (1985: 1555))

また、-able 形容詞においても動詞的受身形においても、(3)の例から分かるように元の動詞の直接目的語が主語になる(Wasow (1977))。

- (3) a. They believe *John's arguments*.  
b. *John's arguments* are believable.  
c. *John's arguments* can be believed.

((3b, c)は Wasow (1977)から ; イタリックは筆者による。)

次に、-able が付加できる動詞の種類と動詞的受身形が許される動詞の種類について検討する。例えば、(4)と(5)に示すように、(多くの) 他動詞は -able を付加することも動詞的受身形にすることも可能である。<sup>2</sup>

---

<sup>1</sup> ただし、-able 形容詞の中には changeable, perishable, suitable のように「～しがちだ」という能動的解釈を持つものも存在する。さらに、能動的解釈と受身的解釈の両方を表す -able 形容詞も存在する。(i)の variable はその例である。

- (i) a. The weather is variable. (能動的解釈)  
b. The date is variable. (受身的解釈) (Quirk et. al. (1985: 1556)を改変)

また、-able が付加する基体が名詞の場合 (例えば marriageable) には上記のいずれでもない意味を持つ。詳しくは Quirk et. al. (1985: 1555ff)や竝木(1990)を参照。

<sup>2</sup> しかし、動詞的受身形や -able 付加が許されない他動詞も存在する(Wasow (1977))。以下の例は Wasow (1977)で提示されているものである。

- (i) a. Bill resembles John.  
b. \*John is resembled by Bill.  
c. \*John is resembleable.  
(ii) a. This car costs too much.  
b. \*Too much is cost by this car.  
c. \*Too much is costable.

- (4) a. Someone washed the shirt.  
b. The shirt is washable.  
c. The shirt was washed.
- (5) a. They believe John's arguments.  
b. John's arguments are believable.  
c. John's arguments can be believed.

((5b, c)は Wasow (1977)より)

これに対し、(6)と(7)の例が示すように非能格動詞は-able を付加することも動詞的受身形にすることも許されない (Horn (1980), Ono (1997))。

- (6) a. \*sneezable, \*danceable,<sup>3</sup> \*swimmable, \*weepable,  
\*runnable, \*barkable (Horn (1980: 139))  
b. \*The athlete was runnable. (Ono (1997))

- 
- (iii) a. The party lasted all night.  
b. \*All night was lasted by the party.  
c. \*All night is lastable.

また、動詞的受身形よりも-able 形容詞方が容認性が高い動詞も存在する (Wasow (1977))。以下の例は Wasow (1977)で提示されているものである。

- (i) a. ??Your unfortunate remarks can be regretted.  
b. Your unfortunate remarks are regrettable.
- (ii) a. ??This car can be afforded.  
b. This car is affordable.
- (iii) a. ?The condition of the library can be deplored.  
b. The condition of the library is deplorable.
- (iv) a. ?Triscuits can be munched.  
b. Triscuits are munchbale.

<sup>3</sup> しかしながら、非能格動詞に-able が付加した例も見受けられる。

- (i) a. This dance is danceable.  
b. This song is singable. (Di Sciullo (1997))

danceable や singable は、他動詞としての dance や sing に-able が付加したものと考えられる。dance や sing が他動詞のような振る舞いをするについては久野・高見 (2002)を参照されたい。

- (7) \*It is danced (by the children). (鷺尾 (2001))<sup>4</sup>

また、(8)と(9)の例から分かるように arrive, exist, happen など、自動使用法しか許さない狭い意味での非対格動詞も非能格動詞と同様に、-able を付加することも動詞的受身形にすることも許されない（影山(1996)、Ono (1997)；Di Sciullo (1997)も参照。非対格動詞が受身形を許容しないことについては Perlmutter (1978)も参照のこと）。

- (8) a. \*existable, \*happenable, \*occurable, \*appearable,  
\*disappearable, \*arisable, \*arrivable, \*emergeable,  
\*glistenable (影山 (1996: 156))  
b. \*The train is arrivable (at London). (Ono (1997))
- (9) \*There is existed by gorillas.  
(Johnson and Postal (1980:378))

このように **-able** が付加できる動詞のタイプと動詞的受身形が許される動詞のタイプには共通性があることが分かる。

以上のように **-able** 形容詞と動詞的受身形との間には類似点が観察されるが、その一方で、相違点も存在する。例えば、非能格動詞や狭い意味での非対格動詞に **-able** が付加することは許されなかったが、自動詞と他動詞の両用法を持つ非対格動詞（つまり、能格動詞）に **-able** が付加できることが影山 (1996) によって指摘されている (cf. Horn (1980))。その例を (10) に示す。

- (10) breakable, burnable, sinkable, openable, movable  
(影山(1996))

また、-able 形容詞では、動詞的受身形と同様に as や from

<sup>4</sup> しかし、よく知られたように、英語以外の言語では非能格動詞を受身形にすることが可能である。この点については、Perlmutter (1978)などを参照のこと。

など、by 以外の前置詞が主要部である PP も現れることができる (Aronoff (1976)、竝木(1990))。このことは(11)に例示されている。

- (11) a. This paragraph will be *recognizable as* a distillation of many discussions on this topic by Chomsky, ... (Ray Jackendoff, 1983, *Semantics and Cognition*, MIT Press, p. 24)
- b. In still others (Semitic), the category ADJECTIVE is *indistinguishable from* the stative or participial form of the verb, ... (Talmy Givón, 1970, "Notes on the Semantic Structure of English Adjectives," *Language* 46, pp. 836-837)
- c. Second, the rule system must be *convertible* by the acquisition mechanism *into* a rule system ... (Stephen Pinker, 1984, *Language Learnability and Language Development*, Harvard University Press, p. 6)
- d. While this is probably *translatable into* Japanese, I am not sure that the proposition would be true. (Herbert Passin, 1977, *Japanese and the Japanese*, Kinseido, p. 2)
- e. This marker will be *applicable to* an animate actor such as "John," ... (Jackendoff, *op. cit.*, p. 182)
- f. ... (which might in turn be *attributable to* other principles) (Andrew Radford, 1981, *Transformational Syntax*, Cambridge University Press, pp. 28-29)
- g. This solution is *preferable to* the phonological solution ... (Steven Strauss, 1982, *Lexicalist*

- h. ... for an argument as to why a maturational process is not *reducible to* other mechanisms ... (Pinker, *op. cit.*, p. 8)

((11): 竝木(1990))

しかし、重要なことに、-able 形容詞において(11)の例のようにある種の PP の出現が許されるものがある一方で、PP が許容されない場合もある(Aronoff (1976)、Di Sciullo (1997))。(12)を参照されたい。

- (12) a. \*The glass is breakable into six pieces.  
b. \*This film is showable to the children.

(a-b: Aronoff (1976))

- c. \*These books are giveable to the library.  
d. \*This story is tellable to children.

(c-d: Di Sciullo (1997))

(12)の例で、PP が存在しないときには文法性が改善することに注意されたい(Aronoff (1976: 49 fn. 4))。このことは(13)に例証されている。

- (13) a. The glass is breakable.  
b. The film is showable. (Aronoff (1976))

なお、(14)と(15)の例から分かるように、動詞的受身形ではこのような PP が存在していても文法性に影響はない。

- (14) a. These may not be *recognized as* symptoms of stress --; that is, until the stress is reduced and the symptoms disappear.  
b. Man may be *distinguished from* the animal by his capacity for non-violence, but it does not mean that

he has shed all vestiges of the animal in him.

- c. The waste wood was *converted into* various useful articles, such as keys, trenails, scotches, --; or firewood.
- d. I asked for my question to be *translated into* Bengali.
- e. Games theory can equally be *applied to* characterizing human norms which are instituted against aggression and other non-cooperative behaviour.
- f. Thus difference should be *attributed to* other factors.
- g. If leisure is *preferred to* income at this point then they will choose the latter alternative.
- h. The problems of alienation and estrangement are *reduced to* problems of access to knowledge.

((14)は British National Corpus (BNC)から ; イタリアンは筆者による。)

- (15) a. This glass can be broken into six pieces.  
b. This film can be shown to children.

(Aronoff (1976))

次節では本節で概観した動詞的受身形と *-able* 形容詞との類似点と相違点について LCS と AS の観点から分析を提示する。

### 3. *-able* 形容詞の語彙意味論的分析

本節では、2 節で概観した動詞的受身形と *-able* 形容詞との類似点と相違点について、LCS と AS の観点から分析を提示する。分析を提出するにあたり、接辞 *-able* の形態的クラスが本節で提案する語彙意味論的分析のみならず、5 節で提案す



る統語的分析においても重要な役割を果たすことになるので、まずはそれについて議論する。

### 3.1. 2 種類の -able

良く知られたように、接辞は音韻的特徴、意味解釈の特異性、および、接辞付加の順序の観点から「I 類」と「II 類」の 2 種類に分けることができる (Siegel (1974), Aronoff (1976), Allen (1978) など)。例えば、(16) と (17) の対比が示すように、I 類に属する接頭辞 *in-* の /n/ は隣接する音素と同化することに対して、II 類の接頭辞 *un-* の /n/ は隣接する音素と同化することが許されない (Allen (1978))。

- (16) a. possible → impossible (/n/ が /p/ と同化)  
b. legal → illegal (/n/ が /l/ と同化)  
c. regular → irregular (/n/ が /r/ と同化)
- (17) a. pleasant → unpleasant / \*umpleasant  
b. lawful → unlawful / \*ullawful  
c. reasonable → unreasonable / \*urreasonable

(Allen (1978) を改変)

また、I 類に属する接頭辞 *in-* には主強勢が置かれる場合があるのに対して II 類の接頭辞 *un-* には主強勢が置かれない (Allen (1978))。このことは (18) と (19) に例示されている。<sup>5</sup>

- (18) a. INfinite  
b. IMpious  
c. IMpotent

- (19) a. unHAPpy  
b. unaWARE ((18) と (19) : Allen (1978) を改変)

さらに、(20) に示すような、*in-* が付加した語の意味と、*un-*

---

<sup>5</sup> 大文字は、その音節に主強勢があることをあらわす。

が付加した語の意味は異なるということが Allen (1978)で指摘されている。

- (20) a. incredible ≠ unbelievable  
b. independent ≠ undeependent

(21)と(22)も同様のことを示している。<sup>6</sup>

- (21) a. nocuous  
= harmful  
a'. innocuous  
= causing no harm; *not intended to offend*  
b. valuable  
= worth a lot of money; very useful or worthwhile or important  
b'. invaluable  
= *of value too high to be measured ; extremely valuable*  
c. famous  
= known to very many people; celebrated; excellent  
c'. infamous  
= *well-known as being wicked or immoral; notorious; wicked; disgraceful*
- (22) a. kind  
= friendly and thoughtful to others  
a'. unkind  
= not having or showing kindness; cruel or harsh

---

<sup>6</sup> (18)における各単語の意味は nocuous を除き、Cowie (ed.) (1989)から引用した。また、以下での議論にとって重要な単語の意味はイタリックで表してある。なお、イタリックは筆者によるものである。

b. happy

= feeling or expressing pleasure, contentment, satisfaction, etc.; full of joy; pleased to do [something]; fortunate; lucky; well suited to the situation; pleasing

b'. unhappy

= sad or miserable; not happy; anxious or dissatisfied; unfortunate or unlucky; not suitable or appropriate

(Cowie (ed.) (1989))

また、I 類の接辞が付加した語に II 類の接辞を付加することは可能であるが、その逆は許されない(Siegel (1974), Allen (1978), Kiparsky (1982)など)。このことは(23)に例証されている。<sup>7</sup>

(23) a. populated

b. unpopulated

b'. [un- [[populate] -ed]]

II

II

c. \*inpopulated

c'. \*[in- [[populate] -ed]]

I

II

(Allen (1978: 22)を改変)

このようにして、音韻的特徴、意味的特徴、接辞付加の順序から、接辞は「I 類」と「II 類」に分類することができることが分かる。

接尾辞-able についても、音韻的性質、意味的特徴、形態的性質により I 類の-able と II 類の-able に分類できることが知られている(以下は Aronoff (1976)に基づく)。例えば、基体に

---

<sup>7</sup> (23)において、「I」と「II」はそれぞれ、I 類の接辞と II 類の接辞を表す。

I 類の **-able** (**-able (I)**) が付加した場合には主強勢の位置の変化が生じるのに対して、基体に II 類の **-able** (**-able (II)**) が付加した場合には主強勢の位置は変化しない。<sup>8</sup>

(24)	基体	<b>-able (I)</b>	<b>-able (II)</b>
a.	comPARE	COMparable	comPARable
b.	rePAIR	REparable	rePAIRable
c.	reFUTE	REfutable	reFUTable
d.	preFER	PREferable	prefERable
e.	disPUTE	DISputable	disPUTable

(Aronoff (1976) を改変)

また、**-able (I)** が付加した語は(20)や(21)の例と同様に特殊な意味を持ちうるが、**-able (II)** が付加した語は(22)の例と同様に語幹と接辞の合成的な意味を持つ。(25)を参照されたい。

- (25) a. This is COMparable model in our line.  
           **(-able (I); COMparable = equivalent)**
- b. The two models are simply not comPARable.  
           **(-able (II); comPARable = capable of being compared)**
- (Aronoff (1976) を改変)

さらに、**-able (I)** が付加した語には否定を表す I 類の接頭辞 **in-** が付加できるのに対して、**-able (II)** が付加した語には否定を表す II 類の接頭辞 **un-** が付加する。このことは(26)と(27)に例証されている。

---

<sup>8</sup> (24)の表で「**-able (I)**」、「**-able (II)**」はそれぞれ、「I 類の**-able**」、「II 類の**-able**」を表す。以下では**-able**のクラスを区別する必要があるときにこのような表記を使うものとし、区別が重要でないときにはクラスを表記せず、単に「**-able**」と記す。

- (26) a. -able (I)  
           imperceptible       \*unperceptible  
           indivisible         \*undivisible
- b. -able (II)  
           \*imperceivable     unperceivable  
           \*individable       undividable
- (27) a. -able (I)  
           irreparable         \*unreparable  
           irrevocable        \*unrevocable
- b. -able (II)  
           \*irreparable       unreparable  
           \*irrevokable       unrevokable

((26)と(27): Aronoff (1976)を改変)

このようにして、-able も他の派生接辞と同様に音韻的、意味的、形態的特徴から 2 種類に分けることができる。

次節では本節での議論を踏まえ、2 節で観察した -able 形容詞に対する制約について LCS と AS の観点から分析を提示する。

### 3.2. -able 形容詞の LCS と AS

本節では、Kageyama (2002)の異常受身形(peculiar passive)の分析を出発点として、-able 形容詞と動詞的受身形の語彙意味論的分析を提示する。

Kageyama (2002)は、(28)に示すような異常受身形<sup>9</sup> と呼ばれる受身形における述語は個体述語(individual-level predicate)であり、AS での事象項(event argument)の抑圧により派生されると主張する。

---

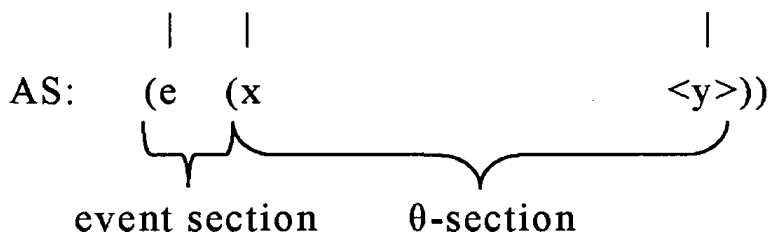
<sup>9</sup> 「異常受身形」と呼ばれる構文では、対応する他動詞文における付加詞内の前置詞の目的語が主語になっていることに注意されたい。

- (28) a. That city has been fought many a battle over.  
 b. He has been burned, stuck pins in, beheaded – all in effigy, of course.  
 c. To be whispered such dirty innuendoes about was enough to break any girl's heart.

(Bolinger (1975))

より具体的には、(29a)に示すように、LCS の Event が外項の一種である事象項として AS に写像され、その後、(29b)に示すように事象項が AS で抑圧されることで述語は具体的な時空間を表すことができなくなり、その結果、述語が個体述語としての性質を持つようになると Kageyama は提案している。<sup>10</sup> また、(29)から分かるように事象項の抑圧とともに外項も抑圧されると Kageyama は仮定している。

- (29) a. LCS: [Event [x ACT] CAUSE [BECOME [y BE AT STATE]]]



- b. (e (x <y>)) (基体動詞の AS ; 「e」は事象項)  
 → (e^ (x <y>))  
 (「e」の抑圧 ; 「^」は、その項が抑圧されていることを表す)  
 → (e^ (x^ <y>))  
 (「e」の抑圧による従属的效果としての「x」の抑圧)

(Kageyama (2002)を改変)

<sup>10</sup> 事象項は外項であるので、抑圧の対象になることができると Kageyama (2002)は主張する。

本稿では Kageyama (2002)の提案する事象項の抑圧を *-able* 形容詞の派生に援用し、*-able* 形容詞は(30)に示す操作により派生されると提案する。

- (30) a. *-able* 形容詞の派生においても、「事象の抑圧」(Kageyama (2002)など)が行われ、LCS でもっとも上位の事象が抑圧される。もし、動詞の LCS が単一の事象から成り立っている場合にはその事象が「もっとも上位の事象」とみなされ、事象の抑圧が適用される。また、動詞の LCS が ACT を中心とする上位事象と、BECOME-BE を中心とする下位事象から成り立っている場合には、上位事象が「もっとも上位の事象」とみなされ、事象の抑圧の対象となる。事象の抑圧の結果、*-able* 形容詞は個体述語としての性質を持つようになる。<sup>11</sup> また、事象の抑圧と同時に、LCS において外項として投射される変項も抑圧される。
- b. 接辞 *-able* はそれが付加した LCS の事象を卓越なもの (salient event) に変え、その事象に含まれる項を項構造に投射する働きがある。もし、LCS が上位事象と下位事象からなる複雑な構造をなしている場合には、*-able* (I) は下位事象を卓越化し、そこに含まれる項を AS に投射させる働きがあるのに対して、*-able* (II) は上位事象を卓越化し、そこに含まれる項を AS に投射させる働きがある。<sup>12</sup>

議論を進める前に、(30)に示された提案について 3 点ほど述べておきたい。まず、*-able* 形容詞は(30a)の提案から、事象

---

<sup>11</sup> Di Sciullo (1997)も、分析の方法は異なるが、*-able* 形容詞は個体述語であると指摘している。以下で提示する(32)の例を参照されたい。

の抑圧により個体述語としての性質を得るようになるので、他の個体述語と同様に *there* 構文に現れることはできない(注 11 も参照)。このことは(31)と(32)の比較から裏付けられる。

- (31) a. *There was a man sick.*  
b. \**There was a man tall.* (Milsark (1974: 214))
- (32) a. \**There are linguists hospitable.*  
b. \**There are people impressionable.*  
c. \**There are chairs transformable.*
- (Di Sciullo (1997))

2 点目に、(30b)では *-able* のクラスにより LCS において卓越化される事象が異なると提案されているが、その理由については 6 節で検討する。

最後に、(30)の提案は *-able* 形容詞の限定的用法(*attributive use*)にも同様に当てはまるものと仮定する。

(30)における提案を図に示すと、動詞の種類に応じて(33)から(36)に示す LCS と AS が得られる。なお、「POSSIBLE」は接辞 *-able* の LCS における表示（この場合の *-able* のクラスは I 類であっても II 類であっても良い）であり、また、「POSSIBLE (II)」と「POSSIBLE (I)」はそれぞれ、II 類と I 類の *-able* の LCS 表示である（以下同様）。さらに、Kageyama (2002)に倣い、「event<sup>^</sup>」と「x<sup>^</sup>」はそれぞれ、抑圧された事象と抑圧された変項をあらわすものとする。

---

<sup>12</sup> (30b)において、「事象を卓越化する」というのは、「事象の前景化（ある事象を取り立てる）」と同義である。



(33) a.  $[\text{event } x \text{ ACT ON } y]$  (活動動詞の LCS)

b.  $[\text{event}^\wedge x^\wedge \text{ ACT ON } y]$

|

POSSIBLE



卓越化された事象

((33a)から事象の抑圧と事象の卓越化により生成された LCS)

c.  $(x^\wedge <y>)$  ((33b)から得られる AS)

(34) a.  $[\text{state } x \text{ BE AT } y]$  (状態動詞の LCS)

b.  $[\text{state}^\wedge x^\wedge \text{ BE AT } y]$

|

POSSIBLE



卓越化された事象

((34a)から事象の抑圧と事象の卓越化により生成された LCS)<sup>13</sup>

c.  $(x^\wedge <y>)$  ((34b)から得られる AS)

(35) a.  $[\text{event}_1 x \text{ ACT ON } y] \text{ CAUSE } [\text{event}_2 (y) \text{ BECOME } [y \text{ BE AT-}z]]$   
(達成動詞の LCS)

b.  $[\text{event}_1^\wedge x^\wedge \text{ ACT ON } y] \text{ CAUSE } [\text{event}_2 (y) \text{ BECOME } [y \text{ BE AT-}z]]$

|

POSSIBLE (II)



卓越化された事象

((35a)から事象の抑圧と上位事象の卓越化により生成された LCS)

c.  $(x^\wedge <y>)$  ((35b)から得られる AS)

<sup>13</sup> 本稿では、LCSにおいて、eventのみならず state も抑圧の対象となると仮定する。

- (36)    a.    [event<sub>1</sub> x ACT ON y] CAUSE [event<sub>2</sub> (y) BECOME [y BE AT-z]]  
                 (達成動詞の LCS)  
        b.    [event<sub>1</sub><sup>Λ</sup> x<sup>Λ</sup> ACT ON y] CAUSE [event<sub>2</sub> (y) BECOME [y BE AT-z]]

### POSSIBLE (I)

卓越化された事象

- c. ( $\langle y, z \rangle$ ) ((36b)から得られる AS)

-able 形容詞の派生に対して、動詞的受身形の派生には(37)に示す操作が関与していると仮定する。

- (37) AS において能動文の主語に相当する外項が抑圧される。(Grimshaw (1990), Kageyama (2002))

(37)により、(38b)のような AS が得られる。

- (38) a. (x <y>) (他動詞の AS)  
b. (x^ <y>) (受身形の AS)

(30)の提案と(37)の仮定から、2節で観察した-ableが付加できる動詞の種類と受身形にできる動詞の種類に対する制限が説明される。まず、(4)と(5)で観察した、他動詞であれば（多くの場合）-ableの付加も動詞的受身形も許されるという事実（それぞれ、(39)と(40)として再録）から検討する。

- (39) a. Someone washed the shirt.  
b. The shirt is washable.  
c. The shirt was washed. (= (4))
- (40) a. They believe John's arguments.  
b. John's arguments are believable.

c. John's arguments can be believed.

((40b, c): Wasow (1977)) (= (5))

(30)の提案から、(39b)に対して(41b, c)に示すような LCS と AS が得られる。

(41) a.  $[_{event} x \text{ ACT ON } [the\ shirt]_y]$  (cf. (39a))

b.  $[_{event}^{\wedge} x^{\wedge} \text{ ACT ON } [the\ shirt]_y]$

|

POSSIBLE



卓越化された事象

c.  $(x^{\wedge} <y>)$

AS に  $y$  が存在することにより the shirt が認可され、(39b)は文法的となる。

また、(37)により、(39c)に対しては(41c)と同様の AS が得られる。そして、the shirt は AS の  $y$  によって認可されるので、(41c)は文法的である。

(39b)と同様に、(40b)に対しては(42b, c)に示すような LCS と AS が得られる。<sup>14</sup>

---

<sup>14</sup> believe (や think, know) は以下の書き換えから分かるように状態動詞であり、「ある信念、意見、知識を持っている」という意味を表す(Forley and Van Valin (1984))。

- (i) a. Fred believes / thinks that Ronald is a fool.  
b. Fred is of the opinion that Ronald is a fool.  
c. Fred holds the belief that Ronald is a fool.
- (ii) a. Barbara knows French cooking thoroughly.  
b. Barbara has a thorough knowledge of French cooking.
- (iii) a. Max knows that the world is round.  
b. It is known to Max that the world is round.

((i) – (iii): Forley and Van Valin (1984))

したがって、believe の LCS は WITH を用いた(42a)に示すようなものになると思われる。なお、WITH は、「所有」の意味を表す述語である(影山(1996), Kageyama (1997)など)。

- (42) a.  $[\text{state } x \text{ BE WITH BELIEF IN } [\text{John's arguments}]_y]$   
 (cf. (39a))  
 b.  $[\text{state}^{\wedge} x^{\wedge} \text{ BE WITH BELIEF IN } [\text{John's arguments}]_y]$   
 |  
 POSSIBLE  
 ───────────  
 卓越化された事象  
 c.  $(x^{\wedge} <y>)$

(42c)で AS に y が存在するので John's arguments が認可され、(40b)は文法的となる。

また、(40c)に対しては AS における外項の抑圧により (42c) と同様の AS が得られ、主語が AS の y によって認可されるので文法的である。

次に、非能格動詞に **-able** を付加できないという事実と、それを受身形にすることができないという事実について検討する。例は(43)と(44)として再録する。

- (43) a. \*sneezable, \*danceable, \*swimmable, \*weepable,  
\*runnable, \*barkable (Horn (1980: 139))  
b. \*The athlete was runnable. (Ono (1997)) (= (6))
- (44) \*It is danced (by the children). (鷺尾(2001))  
(= (7))

例えば、runnable の LCS と AS はそれぞれ、(45b)と(45c)に示すようになる。

- (45) a. [event X ACT <manner: running>]  
 b. [event^ X^ ACT <manner: running>]

|  
POSSIBLE

卓越化された事象

- c. (x^)

(45c)において外項はすでに抑圧されているので、主語位置を占めることのできる要素が項構造中に存在しない。よって、非能格動詞 **run** に **-able** を付加することは許されない。

また、動詞的受身形の **AS** も外項の抑圧により(45c)と同様のものであり、主語位置を占める要素を認可できないために非文法的となる。<sup>15</sup>

次に、狭い意味での非対格動詞に **-able** を付加することやその動詞的受身形が許されないことを2節で概観したが、これらについて検討する。例は(46)に再録する。

- (46) a. \***existable**, \***happenable**, \***occurable**, \***appearable**,  
 \***disappearable**, \***arisable**, \***arrivable**, \***emergeable**,  
 \***glistenable** (影山(1996: 156))  
 b. \***The train is arrivable (at London).** (Ono (1997))  
 (= (8))

例えば、**arrive** の **LCS** は(47)のようになるが、この表示にお

<sup>15</sup> ただし、擬似受身文のように、Pの補部に相当する項が **-able** 形容詞の主語になる場合は文法的である。

- (i) a. Paul laughed at Mary/ the story.  
 b. Mary is laughable.  
 c. The story is laughable.

(i)において、**laugh at** は再分析(reanalysis)により他動詞と同じ **LCS** 表示が与えられ、それが事象の抑圧を受けると考えたい。中島平三氏と谷脇康子氏に対して、このような例を提供して下さったことに感謝する。

いて外項に結び付けられる項が存在しないために事象の抑圧を適用することはできない。それにもかかわらず狭い意味での非対格動詞に事象の抑圧を適用すると、非文法的な例を生成することになってしまう。

(47) [event BECOME [y BE AT-PLACE]]

このような動詞が受動態にならないという事実 ((48)に再録)についても、項構造において外項が存在しないために、外項の抑圧が適用されずに非文になると考えられる。

(48) \*There is existed by gorillas.

(Johnson and Postal (1980:378)) (= (9))

非能格動詞や狭い意味での非対格動詞に対して、能格動詞に **-able** が付加できることは2節で観察したとおりである。その例を(49)として繰り返す。<sup>16</sup>

(49) breakable, burnable, sinkable, openable, movable

(影山(1996)) (= (10))

これらの文法性は以下のように説明される。まず、影山(1996)に従い、能格動詞は自他交替を引き起こすことから、上位事象は CAUSE ではなく CONTROL であると仮定する。<sup>17</sup> このことから、例えば、自動詞としての **break** は CONTROL の主語の **x** と BECOME の主語の **y** が反使役化(anti-causativization)によって同定され、(50b)のような LCS を持つものと考えられる (影山(1996))。

---

<sup>16</sup> 影山(1996)は、**-able** が付加できるのは LCS において外項と内項を持つ動詞に限られるとし、能格動詞にも **-able** が付加できることから、能格動詞の LCS には外項と内項が存在するとしている ((50)の LCS も参照)。

<sup>17</sup> 「X CONTROL Y」は、X が Y の成立を直接的に左右するという意味であり、必ずしも Y の成立を含意するわけではなく、もし Y の成立が含意されれば CONTROL は CAUSE という意味に解釈され、Y の成立が含意されなければ Y は「目標」と解釈される (影山(1996))。



次に PP の継承の可否について検討する。2 節で観察したように、recognize、distinguish などの動詞に -able が付加した場合には PP が継承されるのに対して、break や show などの動詞に -able が付加した場合には PP は継承されない。例はそれぞれ(53)と(54)して再録する。

- (53) a. This paragraph will be *recognizable* as a distillation of many discussions on this topic by Chomsky, ... (Ray Jackendoff, 1983, *Semantics and Cognition*, MIT Press, p. 24)
- b. In still others (Semitic), the category ADJECTIVE is *indistinguishable* from the stative or participial form of the verb, ... (Talmy Givón, 1970, "Notes on the Semantic Structure of English Adjectives," *Language* 46, pp. 836-837)
- c. Second, the rule system must be *convertible* by the acquisition mechanism *into* a rule system ... (Stephen Pinker, 1984, *Language Learnability and Language Development*, Harvard University Press, p. 6)
- d. While this is probably *translatable into* Japanese, I am not sure that the proposition would be true. (Herbert Passin, 1977, *Japanese and the Japanese*, Kinseido, p. 2)
- e. This marker will be *applicable to* an animate actor such as "John," ... (Jackendoff, *op. cit.*, p. 182)
- f. ... (which might in turn be *attributable to* other principles) (Andrew Radford, 1981, *Transformational Syntax*, Cambridge University Press, pp. 28-29)



- g. This solution is *preferable* to the phonological solution ... (Steven Strauss, 1982, *Lexicalist Phonology of English and German*, Foris, p. 121)
- h. ... for an argument as to why a maturational process is not *reducible* to other mechanisms ... (Pinker, *op. cit.*, p. 8)

((53): 竝木(1990)) (= (11))

- (54) a. \*The glass is breakable into six pieces.  
b. \*This film is showable to the children.

(a-b: Aronoff (1976))

- c. \*These books are giveable to the library.
- d. \*This story is tellable to children.

(c-d: Di Sciullo (1997)) (= (12))

まず、(53a)の *recognize* は到達動詞であり、(55b, c)に示すように事象の抑圧により *BECOME* の主語が抑圧され、y と z が AS に投射される。

- (55) a. [<sub>ever</sub> x BECOME [x BEAT RECOGNITION [this paragraph]<sub>y</sub> as [distillation]<sub>z</sub>]]  
b. [<sub>ever</sub> x<sup>^</sup> BECOME [x BEAT RECOGNITION [this paragraph]<sub>y</sub> as [distillation]<sub>z</sub>]]

|  
POSSIBLE

卓越化された事象

- c. (x<sup>^</sup> <y, z>)

したがって、(53a)にあるように PP を継承することができる。また、(53g)については、*prefer* が状態動詞であることから、(40b)の *believable* と同様に分析されると考えられる。*recognizable* と *preferable* 以外の例における PP の継承の可否についてはそれらの例における *-able* のクラスと深い関わり

があるので、分析を提示する前にそのことについて議論しておきたい。

3.1 節では、派生語において、主強勢の位置の変化があるかどうか、特殊な意味を持ちうるかどうか、I 類の接頭辞 **in-** が付加するのか II 類の接頭辞の **un-** が付加するのかを検討し、それらが接辞のクラスを識別する有効な方法として機能することを見た。これらの識別法のうち、強勢の位置の変化に関するテストと付加できる否定の接頭辞に関するテストを(53)と(54)に例示されている **-able** 形容詞に適用すると次のような結果が得られる（特殊な意味を持つかどうかについては本節では取り扱わないが、5 節で **-able** 形容詞の統語構造を検討する際に重要となる）。まず、主強勢の位置の変化については、(53)の例の中に **-able** が付加する前後で強勢の位置が変化するものがある。(56)を参照されたい。

(56)        **apPLY**    →    **APplicable**

さらに、否定を表す接頭辞のうち、I 類の **in-** を付加することができる語が(53)に存在する。このことは(57)に例証されている。

- (57)    a.    **distinguishable**    →    **indistinguishable**  
         b.    **convertible**        →    **inconvertible**  
         c.    **applicable**        →    **inapplicable**  
         d.    **reducible**         →    **irreducible**

I 類の接辞の内側には I 類の接辞しか現れることができないことが知られているが(いわゆる、(拡大) 順序付けの仮説；Siegel (1974)、Allen (1978)、Kiparsky (1982)など)、その事実から、例えば(57a)の **indistinguishable** は(58)のような構造であり、**-able** は I 類であると考えられる。

(58) *in-* [distinguish-*able*]

I

I

同様に、名詞化接尾辞 *-ity* はそれが付加することで主強勢の位置の変化を引き起こすことから I 類の接辞と考えられるが ((59)を参照)、(60)に示すようにそれが(53)の *-able* 形容詞に付加できることから、(53)の *-able* は I 類でなければならないことが分かる。

(59) POPular → popuLARity

(60) a. distinguishable → distinguishability

b. translatable → translatability

c. applicable → applicability

d. reducible → reducibility

例えば、(60b)の構造は(61)のようになる。

(61) [translat - *abil*] - *ity*

I

I

以上の例に対し、(54)の *-able* 形容詞には、I 類の *in-*ではなく II 類の *un-*が付加する。(62)を参照のこと。

(62) a. breakable → \*imbreakable / unbreakable

b. showable → \*inshowable / unshowable

c. giveable → \*ingiveable / ungiveable

d. tellable → \*intellable / untellable

ここで、*-able* が付加された語にさらに II 類の接辞が付加するときには、*-able* は I 類の接辞ではなく、II 類の接辞であると仮定する。以上の議論から、例えば、*breakable* の *-able* は II 類であり、その外側に II 類の *un-*が付加していると考えられる。

(63) *un - [break - able]* (cf. (62a))

II

II

これまでの議論から、(53)の例に現れる *-able* は I 類であり、(54)の例の *-able* は II 類であることが分かった。<sup>20</sup> さて、ここで、2 節で観察した *-able* 形容詞に課せられる制約と、これまでの議論で得られた結論から、(64)の一般化を導き出すことができる（なお、Aronoff (1976)にも同様の指摘が見られる）。

(64) 基体動詞に I 類の *-able* が付加することにより派生される *-able* 形容詞は、基体の直接内項に相当する名詞句と PP を継承することができる。

これに対し、基体動詞に II 類の *-able* が付加することにより派生される *-able* 形容詞は、基体の直接内項に相当する名詞句を継承することができるが、PP を継承することはできない。

(64)の一般化と(30)の提案を元に、(53)と(54)の例の文法性の差を説明する。例えば、(53d)の *translatable*（以下に(65a)として再録）は LCS で上位事象と下位事象の 2 つを持つ動詞 *translate* に *-able* (I)が付加しているものと考えられる。したがって、その LCS は(65b)であり、さらに、(65b)から得られる AS は(65c)である。

---

<sup>20</sup> (53)と(62)の例から、*-able* (I)はラテン語系の語幹に、*-able* (II)はゲルマン語系の基体に付加することが分かる（中島平三氏、個人談話）。

- (65) a. While this is probably *translatable into Japanese*, I am not sure that the proposition would be true. (Herbert Passin, 1977, *Japanese and the Japanese*, Kinseido, p. 2, 竝木(1990)から) (= (11d))

- b.  $[\text{event}^{\wedge} [x^{\wedge} \text{ACT ON } y] \text{ CAUSE } [y \text{ BECOME } [y \text{ BE INTO } z]]]$

|  
POSSIBLE (I)

卓越化された事象

- c.  $\langle y, z \rangle$

this, into Japanese はそれぞれ、AS に存在する  $y$  と  $z$  によって認可されるので(65a)は文法的である。

これに対し、(66a)として繰り返す *showable* は基体に *-able* (II)が付加した構造であり、LCS と AS はそれぞれ(66b)と(66c)に示すようになる。

- (66) a. \*The film is *showable* to the children.

(Aronoff (1976)) (= (12b))

- b.  $[\text{event1}^{\wedge} [x^{\wedge} \text{ACT ON } y] \text{ CAUSE } [\text{event2 } y \text{ BECOME } [y \text{ BE AT-} z]]]$

|  
POSSIBLE (II)

卓越化された事象

- c.  $(x^{\wedge} \langle y \rangle)$

the film は AS の  $y$  によって認可されるが、着点を表す PP はそれに相当する項が AS に存在しないので認可されず、(66a)は非文となる。

なお、2 節で指摘したように着点を表す PP が存在しない場合には文法的になることに注意されたい。

- (67) a. The glass is breakable.  
b. The film is showable. (Aronoff (1976)) (= (13))

例えば、(67b)の LCS と AS はそれぞれ(66b)と(66c)に示したものと同じもので、表層主語は AS の y により認可されるので(67b)は文法的である。

最後に、(53)と(54)の例に使用されている基体動詞の受身形について検討する。2 節で概観し、ここで(68)と(69)として繰り返すように、PP の有無は受動態の文法性に影響を及ぼさない。

- (68) a. These may not be *recognized as* symptoms of stress --; that is, until the stress is reduced and the symptoms disappear.  
b. Man may be *distinguished from* the animal by his capacity for non-violence, but it does not mean that he has shed all vestiges of the animal in him.  
c. The waste wood was *converted into* various useful articles, such as keys, trenails, scotches, --; or firewood.  
d. I asked for my question to be *translated into* Bengali.  
e. Games theory can equally be *applied to* characterizing human norms which are instituted against aggression and other non-cooperative behaviour.  
f. Thus difference should be *attributed to* other factors.  
g. If leisure is *preferred to* income at this point then they will choose the latter alternative.  
h. The problems of alienation and estrangement are *reduced to* problems of access to knowledge.

((68) : BNC から; イタリアックは筆者による。)

(= (14))

(69) a. This glass can be broken into six pieces.

b. This film can be shown to children.

(Aronoff (1976)) (= (15))

例えば、(68d)の *translate* は 3 項動詞であり、(70)の AS を持つ。

(70)  $(x < y, z >)$

(70)に外項  $x$  の抑圧が適用されると、(71)が得られる。

(71)  $(x^{\wedge} < y, z >)$

表層主語は  $y$  に、PP は  $z$  によって認可されるので文法的である。(68)の他の例や(69)も同様に説明される。

### 3.3. まとめ

3 節では 2 節で観察した *-able* 形容詞に対する制約に対して LCS と AS の観点から分析を提示した。特に、*-able* 形容詞の派生には LCS での事象の抑圧とそれに伴う変項の抑圧、さらに、事象の卓越化が関与していると主張した。4 節では本節で提案した分析のさらなる帰結について議論する。

## 4. さらなる帰結

本節では 3.2 節で提出した提案のさらなる帰結を議論する。具体的には、4.1 節で「壁塗り構文」と呼ばれる構文に使用される動詞に由来する *-able* 形容詞について検討する。また 4.2 節では、Wasow (1977)の指摘する *-able* 形容詞の派生に課せられる制約が 3.2 節での提案と結びつけ規則から導き出されることを示す。

#### 4.1. 「壁塗り動詞」由来の-able 形容詞について

本節では、(72)と(73)に示す *spray* や *load* などの「壁塗り動詞」に-able が付加した例について検討する。

- (72) a. John loaded hay on the truck.  
b. John loaded the truck with hay.
- (73) a. John packed the books into the trunk.  
b. John packed the trunk with the books.

これらの動詞が使用された文では、(72a)と(73a)のように、積まれるもの(物材)にそれが積まれる場所が後続する語順と、(72b)と(73b)のように、それらが逆転する語順とが許される。そして、(74)と(75)から分かるように、これらの動詞に対しても-able を付加することができる。

- (74) a. easily loadable hay  
b. an easily loadable truck
- (75) a. an easily packable book  
b. an easily packable trunk

これらの例の文法性を考えるにあたっては、壁塗り動詞の LCS と、(74)と(75)の例の-able のクラスを考える必要がある。なので、まずはそれらについて検討し、その上で(74)と(75)の例の文法性についての分析を提示する。

壁塗り動詞の LCS については、主題項が直接目的語になった場合と、場所項が直接目的語になった場合とでは異なると考えられる。具体的には、(76a)と(77a)の文に対応する LCS はそれぞれ、(76b)と(77b)であると考えられる(cf. Kageyama (1997))。

- (76) a. John loaded hay onto the truck.  
b. [[John]<sub>x</sub>ACT ON [hay]<sub>y</sub>] CAUSE [y BECOME [y BE ON(TO) [the truck]<sub>z</sub>]



- (77) a. John loaded the truck with hay.  
 b. [[John]<sub>x</sub>ACT ON [the truck]<sub>y</sub>] CAUSE [y BECOME [y BE WITH [hay]<sub>z</sub>]

(76b)では BE の目的語が ON(TO)で、(77b)ではそれが所有の意味を表す WITH(注 14 を参照)であることに注意されたい。この LCS により、従来から指摘されている「壁塗り動詞構文」における全体的解釈(holistic interpretation; Anderson (1971)など)の有無が捉えられる。つまり、(76b)では ON(TO)が使用されていることから、物材の移動（干草のトラックへの積載）の意味が得られ、また、(77b)では WITH が使用されていることからトラックが干草で満載になったという意味が得られる。

また、項の結び付けの観点からしても(76b)と(77b)の表示は望ましい。4.2 節で後述するように、BE の主語である y は統語構造では直接目的語に結び付けられる。したがって、(76b)では hay が、(77b)では the truck がそれぞれ、統語構造で直接目的語位置に結び付けられることが予測される。そして、直接目的語位置に結び付けられた項は、(78)に例示するように述語が名詞化されると of で標示されることが知られているが、壁塗り動詞の直後に置かれる項も動詞が名詞化されると of で標示されることから((79)と(80)を参照)、その予測が正しいことが分かる。

(78) the enemy's destruction of the city

(79) a. John's loading of the truck

b. John's loading of the hay

(80) a. John's packing of the trunk

b. John's packing of the book

複合語の事実も、壁塗り動詞の直後に置かれる項が直接目的語であることを支持する。英語では(81)と(82)に示すように、他動詞から派生した複合語の非主要部(複合語の左側の要素)

は通常、基体の直接目的語に相当する項でなければならないことが知られている(Roeper and Siegel (1978), Selkirk (1982), Grimshaw (1990), Harley (2003))。

- (81) 非主要部 = 直接目的語
- a. peacemaking (cf. make peace)
  - b. boat-making (cf. make boats)
- (Roeper and Siegel (1978)を改変)
- (82) a. \*girl-swimming (cf. Selkirk (1982))  
(非主要部 = 主語)  
cf. the girl swam.
- b. \*quick-making (非主要部 = 付加詞)<sup>21</sup>  
cf. \*make quickly
- (Roeper and Siegel (1978)を改変)

壁塗り動詞構文において、動詞の直後に置かれる項も(83)と(84)の例が示すように複合語の非主要部になれることから、それは直接目的語であることが分かる。

- (83) a. ?truck-loading  
b. ?hay-loading
- (84) a. ?box-packing  
b. ?book-packing

次に、(74)と(75)の例の -able のクラスについて検討する。(85)の例は、loadable と packable に否定の接頭辞が付加する際には、II 類の un-でなければならないことを示している。

---

<sup>21</sup> ただし、自動詞由来複合語の場合には、(i)のように副詞を複合語の非主要部とすることも可能である (Roeper and Siegel (1978))。

(i) a. fast-growing crop (cf. grow fast)  
b. \*fast-growing farmer (cf. grow something fast) (Roeper and Siegel (1978))

- (85) a. loadable → \*illoadable / unloadable  
 b. packable → \*impackable / unpackable

(拡大) 順序付けの仮説(Siegel (1974), Allen (1978), Kiparsky (1982)など)により、これらの例の -able は II 類であり、loadable や packable は(86)のような構造であることが分かる。

- (86) a. un- [load -able]  
           II                  II  
 b. un- [pack -able]  
           II                  II

以上の議論を踏まえて、(74)と(75)の例の文法性を検討する。まず、(76a)((87a)として再録)の LCS と AS はそれぞれ、(87b)と(87c)である。

- (87) a. easily loadable hay  
 b. [event<sup>^</sup> [x<sup>^</sup> ACT ON [hay]<sub>y</sub>] CAUSE [y BECOME [y BE ON(TO) z]]  
           |  
           POSSIBLE (II)  
           └──────────┘  
           卓越化された事象  
 c. (x<sup>^</sup> <y>)

(87c)の AS に y が存在することから、hay が認可され、(87a)は文法的である。

同様に、(74b)((88a)として再録)の LCS と AS はそれぞれ、(88b)と(88c)である。

- (88) a. an easily loadable track  
 b.  $[\text{event}^{\wedge} [\text{x}^{\wedge} \text{ACT ON } [\text{track}]_y] \text{ CAUSE } [y \text{ BECOME } [y \text{ BE WITH } z]]]$   
       |  
       POSSIBLE (II)  
       └───┘  
       卓越化された事象  
 c.  $(\text{x}^{\wedge} <\text{y}>)$

(88c)の AS において y が存在することから track が認可され、(88a)は文法的である。

#### 4.2. 「直接目的語制約」について

Wasow (1977)は-able 形容詞に課せられる制約として、(89)を指摘している。なお、以下では(89)の制約を説明の便宜上、「直接目的語制約」と呼ぶことにする（この呼称は、筆者によるものである）。

- (89) 直接目的語制約：  
 -able 形容詞の主語になることができるのは、基体の動詞の直接目的語に相当する項である。

(89)の制約により、下記の例の（非）文法性が説明できると Wasow は主張する((90)と(91): Wasow (1977)から)。<sup>22</sup>

- (90) a. That story isn't tellable.  
       b. \*John isn't tellable.  
 (91) a. This book can be read.  
       b. This book is readable.  
       c. Johnny can be read this book.  
       d. \*Johnny is readable this book.

<sup>22</sup> (90)と(91)の例は、-able 形容詞と動詞的受身形との間には必ずしも相関関係が成立しないということを示しているが（2節の後半も参照）、この事実については3.2節で主張したように、形成レベルの違いに由来するものである。

例えば、(90b)で主語の John は動詞 tell の間接目的語に相当する項であり、(89)の制約を満たしていないので、(90b)は非文であると説明される。(91d)の非文法性も同様に説明される。これに対して(91b)では動詞 read の直接目的語に相当する項である this book が主語になっているので(89)の条件に合致し、文法的である。

また、(92b)では補文の主語が、(93b)ではイディオムの一部が、-able 形容詞の主語となっているが、それらはいずれも基体動詞の直接目的語とはみなされないために非文である。

- (92) a. John's arguments can be believed to be plagiarized.  
b. \*John's arguments are believable to be plagiarized.
- (93) a. This seven notrump contract can be made too much of.  
b. \*This seven notrump contract is makeable too much of.

((92)と(93): Wasow (1977))

以下では、「直接目的語制約」は 3.2 節での提案と(94)に示す結び付け規則(linking rule)から導き出せることを議論する。

23

- (94) a. ACT の主語は外項に結び付けられる。  
b. BE の主語は直接内項に結び付けられる。もし、動詞の LCS に ACT-ON しか存在しない場合には、ACT-ON の目的語が直接内項に結びつけられる。  
c. BE の目的語は間接内項に結び付けられる。  
d. 状態動詞では、BE の主語が外項に、目的語が直接内項に、それぞれ結び付けられる。

---

<sup>23</sup> 影山(1996)も(94)と同じような結び付け規則を提案しているが、(94)では状態動詞の結び付け規則(94d)を考慮に入れている点が、影山の結び付け規則とは異なっている。

はじめに、活動動詞由来の **-able** 形容詞について検討してみたい。3.2 節では、(95a)の **washable** に対しては(95b)の LCS と(95c)の AS が得られることを議論した。

(95) a. The shirt is washable. (= (41))

b.  $[\text{event}^{\wedge} x^{\wedge} \text{ACT ON } [\text{the shirt}]_y ]$

|  
POSSIBLE

卓越化された事象

c.  $(x^{\wedge} <y>)$

3.2 節での提案から、**-able** 形容詞の派生において項構造や統語構造と結び付けられるのは **ACT ON** の目的語に相当する  $y$  であるが、(94)の結びつけ規則からその項は本来、直接目的語に結び付けられるものであり、それが統語構造上では**-able** 形容詞の表層主語として現れる。したがって、活動動詞に **-able** が付加した場合は元の動詞の直接目的語に相当する項が派生形容詞の主語になる。

同様の議論が状態動詞についても適用できる。例えば、**believable** の LCS と AS はそれぞれ、(96b)と(96c)であることを 3.2 節で主張した。

(96) a. John's arguments are believable.

b.  $[\text{state}^{\wedge} x^{\wedge} \text{BE WITH BELIEF IN } [\text{John's arguments}]_y ]$

|  
POSSIBLE

卓越化された事象

c.  $(x^{\wedge} <y>)$

(96c)においても(95)の例と同様に、本来、直接目的語に結び

付けられるべき  $y$  が存在し、それが派生形容詞の表層主語として現れている。

次に達成動詞に I 類の **-able** が付加することにより派生された **translatable** について考察してみたい。3.2 節で詳しく議論したように、**translatable** の LCS と AS はそれぞれ、(97b) と (97c) のようになる。

- (97) a. While this is probably *translatable into Japanese*, I am not sure that the proposition would be true.  
(Herbert Passin, 1977, *Japanese and the Japanese*, Kinseido, p. 2, 竝木(1990)から引用) (= (62))

- b. [<sub>event</sub> x<sup>^</sup> ACTION [<sub>this</sub>]<sub>y</sub>] CAUSE [<sub>event</sub> y BECOME [y BE [into Japanese]<sub>z</sub>]]

|  
POSSIBLE (I)

卓越化された事象

- c. (<y, z>)

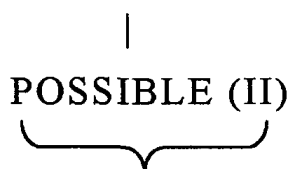
(97c) の AS に  $y$  が存在することに注意されたい。結びつけ規則(94b)により、その項は本来、直接目的語に結び付けられるものであり、それが **translatable** の表層主語として現れる。したがって、達成動詞に **-able (I)** が付加した場合は元の動詞の直接目的語に相当する項が派生形容詞の主語になることが言える。

最後に、同じ達成動詞でも(98)のような基体に **-able (II)** が付加した例について考えてみたい。

- (98) The film is showable. (Aronoff (1976)) (= (13b))

**showable** の LCS と AS はそれぞれ、(99a) と (99b) に示されている。

(99) a. [event<sup>^</sup> [x<sup>^</sup> ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT z]]]



卓越化された事象

b. (x<sup>^</sup> <y>)

(99b)の AS においても(97c)と同様に、y が存在することに注意されたい。結びつけ規則により、その項は本来、直接目的語に結び付けられるものであり、それが **showable** の表層主語として現れる。したがって、**show** に **-able (II)** が付加した場合も元の動詞の直接目的語に相当する項が派生形容詞の主語になることが言える。

以上の議論から、動詞の種類や **-able** のクラスにかかわらず、**-able** 形容詞の AS には本来、直接目的語として統語構造に写像される項が存在し、それが派生形容詞の主語になることが確かめられた。

なお、(100)に示す、補文主語が **-able** 形容詞の主語になれないという事実については以下のように考えたい。

(100) a. John's arguments can be believed to be plagiarized.

b. \*John's arguments are believable to be plagiarized.

(= (92))

**believe** の LCS が(101)のように表されることは 3.2 節で示したが、ECM 構文についても同様の表示が得られると仮定する。つまり、(101)の x は能動文の主語に、y は不定詞補文に相当すると仮定する。

(101) [x BE WITH BELIEF IN y]

(101)に事象の抑圧と事象の卓越化を適用して得られる AS が



(102)である。

(102)        ( $x^{\wedge} \langle y \rangle$ )

y は不定詞補文全体に相当するので、believable の主語はその補文全体でなければならないが、(100b)では補文の一部である John's arguments のみが主語となっている。したがって、(100b)は非文であると考えられる。

また、(103)に示す、イディオムの一部が-able 形容詞の主語にならないということの理由については、-able 形容詞が個体述語であることと関係していると思われるが、本稿ではこれ以上の議論は行わない。

- (103) a. This seven notrump contract can be made too much of.  
b. \*This seven notrump contract is makeable too much of.

(Wasow (1977)) (= (93))

以上のように直接目的語制約は、3.2 節で提案した分析と結びつけ規則から導き出すことができる。

## 5. -able 形容詞の統語的分析

3 節と 4 節では-able 形容詞の派生を語彙意味論の観点から検討した。本節では、-able 形容詞の統語的側面について議論する。以下で展開する議論は(104)のようにまとめることができる。

- (104) I 類の-able / -ible は V に直接付加するのに対して、II 類の-able は  $a^0$  に存在し、PF で V と-able が併合される。

以下では、Kamiya (2002)が提案している接辞の位置の違いと

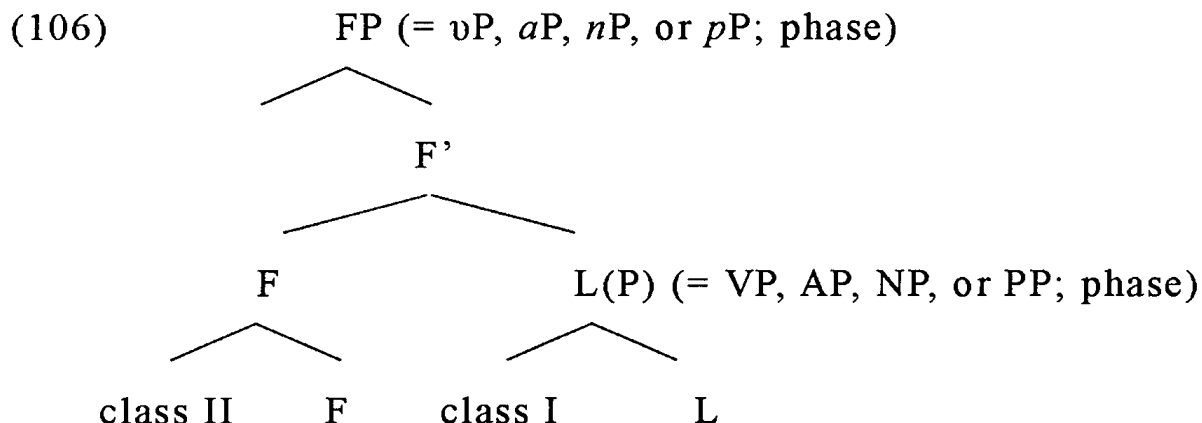
接辞の振る舞いの違いに関する分析を概観し、その上で *-able* の統語構造上の位置を検討する。

接辞のクラスが違おうとそれに応じて音韻的、意味的振る舞いが異なることを 3.1 節で概観したが、その事実を Kamiya (2002) は *phase* の観点から分析している。特に Kamiya は、(105) に示す提案を行っている。

- (105) a. Class I morphemes undergo affixation (or adjunction by merger) to a stem, such as V, A, N, and P, in  $L^0$  (Lexical head).
- b. Class II morphemes undergo affixation (or adjunction by merger) to a functional head in  $F^0$ , such as *v* (light verb), *a* (light adjective), *n* (light noun), and *p* (light preposition).
- c. FP, the projection of F, is regarded as a strong phase in the sense of Chomsky (2000, 2001a, 2001b), because F carries uninterpretable features (e.g. uninterpretable  $\Phi$ -features, and the optional EPP-feature) and may take an external argument.
- Furthermore, FP is subject to Spell-Out at some point in a derivation. Similarly, LP is also regarded as a (strong) phase, in the sense that all of the (internal) arguments of L are satisfied within the projection, though L does not bear uninterpretable features (such as uninterpretable  $\Phi$ -features), and the optional EPP-feature.
- d. While an affix in  $L^0$  undergoes affixation in the syntax, an affix in a projection higher than  $F^0$  undergoes affixation at PF.

(Kamiya (2002))

(105)の提案を図示したものが(106)である。



(Kamiya (2002))

(105)に基づき Kamiya は、I 類の *in-*は基体とともに LP 内に存在し、LP がスペルアウトされることによりそれが音韻部門で隣接する音素と同化したり、意味部門で特殊な解釈を受けたりすると提案している。一方、II 類の *un-*は F にあるので、隣接する音素と同化したり、意味部門で特殊な意味を付与されない。この提案に従えば、例えば、*impossible*、*invaluable*、*unhappy* の構造はそれぞれ(107a)、(107b)、(107c)であり、(107a)と(107b)は上で述べたメカニズムにより音韻部門や意味部門で特殊な意味解釈を受ける。また、(107c)については *un-*が F に存在することから合成的な意味解釈になる。<sup>24</sup>

- (107) a.  $[_{aP} a^0 [_A \text{ in - possible}]]$   
 b.  $[_{aP} a^0 [_A \text{ in - valuable}]]$   
 c.  $[_{aP} [_a \text{ un-}] [_A \text{ happy}]]$

Kamiya の提案は *-able* 形容詞にも適用できる。3.1 節で観察したように、*-able* (I)は主強勢の位置の変化を引き起こし、*-able* (II)はそのような変化は引き起こさない(Aronoff (1976))。

<sup>24</sup> *in-*が付加した語は特殊な意味解釈を受けることがあるのに対して、*non-*が付加した語は必ず基体と接辞の合成的な意味になる。また、*un-*が付加した語は意味解釈の点で両者の中間的な性質を持つ (Allen (1978))。

例を(108)として繰り返す。

(108)	基体	-able (I)	-able (II)
a.	comPARE	COMparable	comPARable
b.	rePAIR	REparable	rePAIRable
c.	reFUTE	REfutable	reFUTable
d.	preFER	PREferable	prefERable
e.	disPUTE	DISputable	disPUTable

(Aronoff (1976)を改変) (= (24))

また、3.1 節では -able (I) の付加した語は特別な意味を持ちうるのに対して、-able (II) の付加した語にはそのようなことはないこと (Aronoff (1976)) も観察した。

- (109) a. This is COMparable model in our line.  
(-able (I); COMparable = equivalent)
- b. The two models are simply not comPARable.  
(-able (II); comPARable = capable of being compared)

(Aronoff (1976)を改変) (= (25))

Kamiya の提案に従えば、COMparable (-able (I) が基体に付加) と comPARable (-able (II) が基体に付加) の構造はそれぞれ (110a) と (110b) のようになる。

- (110) a. [<sub>aP</sub>  $\alpha^0$  [<sub>A</sub> compare – able]]
- b. [<sub>aP</sub> [<sub>a</sub> –able] [<sub>V</sub> compare]]

(110a) に示すように、-able (I) は A に位置するので、スペルアウトにより音韻部門では主強勢の変化を受け、また、意味部門では慣習的に確立された意味解釈を受けると考えられる。また、-able (II) は  $\alpha$  に位置し、音韻部門で語幹と併合されるので主強勢の変化を受けることはなく、また、意味部門でも

合成的な意味解釈を受けると考えられる。

さらに、(26)と(27)に例示したように（それぞれ、(111)と(112)として再録）、-able (II)の付加した基体に I 類の接頭辞 in-を付加することができないという事実（Aronoff (1976)）も、Kamiya (2002)の分析を -able 形容詞に援用することで説明できる。

- (111) a. -able (I)  
          imperceptible       \*unperceptible  
          indivisible         \*undivisible  
      b. -able (II)  
          \*imperceivable     unperceivable  
          \*individable       undividable
- (112) a. -able (I)  
          irreparable        \*unreparable  
          irrevocable        \*unrevocable  
      b. -able (II)  
          \*irreparable       unrepairable  
          \*irrevokable       unrevokable

((111)と(112): Aronoff (1976)を改変)

Kamiya は(113b) / (114b)と(113c) / (114c)の文法性の差について、構造的観点から説明を試みている。

- (113) a. precededented  
      b. unprecedented  
      c. \*inprecedented           (Allen (1978: 22)を改変)
- (114) a. populated  
      b. unpopulated  
      c. \*inpopulated           (Allen (1978: 22)を改変)

例えば、(114b)の構造は(115)であり、これは、語彙範疇の投

射 (V) の上位に機能範疇の投射 (*aP*) があるという点で(106)の構造に合致しているので文法的である。

(115)        [<sub>*aP*</sub> [<sub>*a*</sub> un-] [<sub>*aP*</sub> [<sub>*a*</sub> -ed] [<sub>*v*</sub> populate]]]

一方、(114c)の構造は(116)であり、これは、機能範疇の投射 (*aP*) の上位に語彙範疇 (A に付加すると考えられる接頭辞 in-) があるという点が(109)の構造に合致しておらず、非文法的である。

(116)        \*[<sub>*AP*</sub> [<sub>*A*</sub> in-] [<sub>*aP*</sub> [<sub>*a*</sub> -ed] [<sub>*v*</sub> populate]]]

Kamiya の分析を -able 形容詞に援用すると、例えば、(111b) の undividable と \*individable の構造はそれぞれ、(117a)と(117b)のようになると考えられるが、前者は(115)と同様の理由で文法的であり、後者は(116)と同様の理由で非文法的であると言える。

(117) a.    [<sub>*a*</sub> un [<sub>*a*</sub> [<sub>*v*</sub> divide] -able]]

b.    \*[<sub>*A*</sub> in- [<sub>*a*</sub> [<sub>*v*</sub> divide] -able]]

なお、(111a)や(112a)の例では、基体への -able (I)の付加後に II 類の接頭辞 un-が付加しているにもかかわらず非文法的であるが、この理由については、すでに in-を付加することにより派生された語が存在するために、それが -able 形容詞への un-の付加を阻止するためであると考ええる。

## 6. 統語構造、LCS と音韻部門の関係について

本節では 3.2 節で提示した語彙意味的分析と、5 節で提示した統語的分析から、LCS と統語構造の関係を検討し、あわせて音韻部門との関わりも考察する。また、これらの関係を検討することで 3 節の分析では深く議論しえなかった、-able (I)は LCS の下位事象を、-able (II)は LCS の上位事象を卓越化

することの理由を示す。最後に、本節での議論から得られる帰結について検討する。

まず、統語構造における主要部 *v* と *V* の意味内容について LCS との関わりで検討する。例えば、(118a)のような語彙的使役文は(118b)のような LCS (影山(1996)) と(118c)のような統語構造 (基底構造) を持つ。

- (118) a. John broke the vase.  
b. [[John]<sub>x</sub> CONTROL [[the vase]<sub>y</sub> BECOME [y BE AT BROKEN]]]  
c. [TP [T -ed] [<sub>vP</sub> John *v* [<sub>VP</sub> the vase [<sub>V</sub> break]]]].

(118b)の CONTROL は下位事象に焦点 (focus) / 際立ち (saliency) が置かれた場合には CAUSE (使役) という意味に解釈される (影山 (1996: 86-87); 本稿の脚注 17 も参照)。このことから、LCS において使役の意味をもつ要素は統語構造の *v* に対応するものと考えられる。<sup>25</sup>

しかし、*v* が常に使役の意味を表すとはできない。例えば、活動動詞 hit は(119b)のような LCS で表され、(119c)の統語構造 (基底構造) と対応する。

- (119) a. John hit Mary.  
b. [[John]<sub>x</sub> ACT ON [Mary]<sub>y</sub>]  
c. [TP [T -ed] [<sub>vP</sub> John *v* [<sub>VP</sub> [<sub>V</sub> hit] Mary]]]

このことから、LCS の ACT は統語構造では *v* に対応すると考えられる。同様に、状態動詞は LCS において(120b)のように BE で表されるが、統語構造ではそれが *v* に対応している。

- (120) a. They believe John's arguments.  
b. [[They]<sub>x</sub> BE WITH BELIEF IN [John's arguments]<sub>y</sub> ]  
c. [TP T [<sub>vP</sub> They *v* [<sub>VP</sub> [<sub>V</sub> believe] John's arguments]]]

---

<sup>25</sup> *v* が CAUSE の意味を表すことについては Chomsky (1995) も参照。

次に、V が LCS のどの要素に対応しているかについて(118)の達成動詞の例（(121)として再録）を元に検討する。

- (121) a. John broke the vase.  
 b. [[John]<sub>x</sub> CONTROL [[the vase]<sub>y</sub> BECOME [y BE AT BROKEN]]]  
 c. [TP [T -ed] [<sub>vP</sub> John v [<sub>VP</sub> the vase [<sub>v</sub> break]]]].

上で述べたように、LCS において使役の意味を表す CONTROL/CAUSE は *v* に対応することから、LCS の残された部分、つまり、状態変化を表す BECOME 以下の下位事象が V の意味に対応すると考えられる。<sup>26</sup> 同様に、対象物の位置の変化を表す put などの動詞においては、位置の変化を表す下位事象が V の意味に相当すると思われる。

これまでの議論をまとめると(122)のようになる。なお、説明の便宜上、*v* はその意味内容に応じて、CAUSE などの下付き文字(subscript)を付与する。

(122)

統語範疇	LCS に対応する意味述語	意味内容
<i>v</i> <sub>CAUSE</sub>	CONTROL / CAUSE	使役
<i>v</i> <sub>ACT</sub>	ACT (ON)	活動
<i>v</i> <sub>BE</sub>	BE	状態
V	BECOME – BE	状態／位置の変化

形容詞についても同様の議論が適用できると仮定する。つまり、形容詞句は動詞句と並行的に *a* と A からなり、*a* は *v* に、A は V に相当することから、前者は「使役」「動作」「状態」

<sup>26</sup> Hale and Keyser (1993)などにおいても、V は状態変化の意味を表すと仮定されている。



のいずれかの意味を持ち、後者は「状態変化」「位置変化」の意味を持つと考える。

さて、以上の結論と 5 節での接辞の位置に関する提案をもとに、3.2 節の分析で議論しなかった **-able** (II) は上位事象を卓越化し、**-able** (I) は下位事象を卓越化する理由について検討する。5 節で提案したように **-able** (II) は統語構造上で *a* に存在することから、それは *a* の意味に対して「何らかの影響」を与えると考えられる。ここで、「何らかの影響」を LCS における卓越化として解釈すると、**-able** (II) は *a* の意味内容に対応する LCS の「CAUSE (／ACT／BE)」、つまり、上位事象を卓越化する働きがあると言える。同様に、**-able** (I) は統語構造上で *V* に付加することから、それは *V* の意味内容に対応する LCS、つまり、BECOME – BE を卓越化する働きがある。

また、接辞の音韻的性質については、Kamiya (2002) の提案から、*v* や *a* に存在する接辞は同化などの音韻的影響を受けないのに対して、*V* や *A* などに存在する接辞は音韻的影響を受けることから考えて、接辞が占める統語的位置が違うと、その音韻的性質が決まると言える。

以上の LCS と統語の関係と、統語と音韻部門との関係を統合すると、以下の結論が得られる。つまり、形容詞化接辞 **-able** に関する限りは、それが統語構造上、どこの位置にあるかが決まると、それに応じて、LCS でどの事象が卓越化されるか、および、その接辞の音韻的性質が決まる。このことを (123) にまとめる。

(123)

	-able (II)	-able (I)
統語構造における位置	$a^0$	V と直接併合
LCS において卓越化される事象	上位事象	下位事象
音韻的性質	特になし	主強勢の移動 隣接する音素との同化 など

最後に、本節での議論から得られる帰結について3点ほど、簡単に検討する。まずは、言語習得に関わる帰結である。(123)の表から分かるように、-able のクラスが習得できれば、その統語的位置のみならず LCS においてどの事象が卓越化されるかも習得でき、2節で観察した -able 形容詞の派生に課せられる制約や、音韻的性質を自動的に導き出すことができる。つまり、-able 形容詞の習得に当たっては -able のクラスを習得するだけで済むようになり、習得事項がより簡潔になる。

2点目に、文法における LCS や AS の位置づけについて考えてみたい。3節や4節で、特定の項が統語構造上に表出できるかどうかは LCS における操作によって決定されると主張したが、この分析が正しいとするならば、LCS や AS は(少なくとも) -able 形容詞の項の継承を捉える上で必要不可欠な部門であると言える。また、5節で議論したように、-able 形容詞の音韻的、意味的性質は -able の統語上での位置に強く依存しているが、そのような性質は LCS や AS では捉えきれず、このような理由から統語部門も独立して必要になる。

3点目に、本稿の分析が正しければ、語形成と呼ばれる過

程は、単一の部門で行われるのではなく、様々な部門間で行なわれることになる。例えば、本稿で論じてきた-able 形容詞は LCS においては事象項と外項の抑圧が適用され、統語部門では-able が基体に付加することにより派生される。

## 7. 結論

本稿では-able 形容詞について LCS、AS と統語的観点から検討した。特に 3 節では-able 形容詞の派生には事象の抑圧とそれに伴う変項の抑圧、-able 付加による LCS の卓越化が関与していると主張した。また、LCS が上位事象と下位事象から成り立っている場合には-able のクラスによって卓越化される事象が異なることを提案した。4 節では 3 節での分析のさらなる帰結として、壁塗り動詞に-able が付加できるという事実について LCS の観点から分析を示した。また、Wasow (1977)の指摘する-able 形容詞の派生に課せられる制約が LCS を用いた分析と結びつけ規則から導き出せることも示した。5 節では-able 形容詞の統語的分析を提出し、-able のクラスによって接辞の位置が違ふことを議論した。最後に 6 節では、3 節で提案した LCS に基づく分析と 5 節で提案した統語的分析を統合し、統語構造と LCS と音韻部門との間には深い関係があることを示した。

## 参考文献

- Allen, M. R. (1978) *Morphological investigations*, Ph.D. dissertation, University of Connecticut.
- Anderson, Stephen. (1971) "On the Role of Deep Structure in Semantic Interpretation," *Foundations of Language* 7, 387-396.
- Aronoff, M. (1976) *Word Formation in Generative Grammar*, MIT

Press.

- Bolinger, D. (1975) "On the Passives in English," in Makkai and Makkai (eds.), 57-80.
- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press.
- Chomsky, N. (2000) "Minimalist Inquires: The Framework," in Martin, Michaels, and Uriagereka (eds.), 89-155.
- Chomsky, N. (2001a) "Derivation by Phase," in Kenstowicz (ed.), 1-52.
- Chomsky, N. (2001b) "Beyond Explanatory Adequacy," *MIT Occasional Papers in Linguistics* 20.
- Culicover, P. et. al. (eds.) (1977) *Formal Syntax*, Academic Press.
- Di Sciullo, A-M. (1997) "Selection and Derivational Affixes," in Dressler, Prinzhorn, Rennison (eds.), 79-95.
- Dressler, W. U, M. Prinzhorn., and J. R. Rennison (eds.) (1997) *Advances in Morphology*, Mouton de Gruyter.
- Forley, W. and R. Van Valin Jr. (1984) *Functional Syntax and Universal Grammar*, Cambridge University Press.
- Grimshaw, J. (1990) *Argument Structure*, MIT Press.
- Hale, K. and S. Keyser. (1993) "On Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relations," in Hale and Keyser (eds.), 53-109.
- Hale, K. and S. Keyser (eds.) (1993) *The View from Building 20*, MIT Press.
- Harley, H. (2003) "Merge, Conflation, and Head Movement: The First Sister Principle Revisited," *NELS* 34, 239 – 254.
- 平河内健治 (編) (1990) 『生成文法の方位』、松柏社.
- Horn, L. R. (1980) "Affixation and Unaccusative Hypothesis," *CLS* 16, 134-146.
- Johnson, D. and P. M. Postal (1980) *Arc Pair Grammar*, Princeton University Press.

- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』、くろしお出版。
- Kageyama, T. (1997) “Denominal Verbs and Relative Salience in Lexical Conceptual Structure,” in Kageyama (ed.), 45-96.
- Kageyama, T. (ed.) (1997) *Verb Semantics and Syntactic Structure*, Kuroshio.
- Kageyama, T. (2002) “On the Role of the Event Argument in Voice Alternation,” 『人文論究』 52, 79-96、関西学院大学。
- Kamiya, N. (2002) “The Phase in Word Formation,” *Linguistic Analysis* 32, 103 – 129.
- Kenstowicz, M. (ed.) (2001) *Ken Hale: a Life in Language*, MIT Press.
- Kiarsky, P. (1982) “Lexical Morphology and Phonology,” in Yang (ed.), 3 – 91.
- 久野暉・高見健一 (2002) 『日英語の自動詞構文』、研究社。
- Makkai, A. and V. B. Makkai. (eds.) (1975) *The First LACUS Forum*, Hornbeam Press.
- Martin, R., D. Michaels, and J. Uriagereka. (eds.) (2000) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, MIT Press.
- Milsark, G. L. (1974) *Existential Sentences in English*, Ph.D. dissertation, MIT.
- 中島平三 (編) (2001) 『最新 英語構文事典』、大修館。
- 竝木崇康 (1990) 「英語の接尾辞 -able」、平河内 (編)、326-357.
- Ono, N. (1997) “Externalization and Event Structure,” in Kageyama (ed.), 149-176.
- Perlmutter, D. M. (1978) “Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis,” *BLS* 4, 157 – 189.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.
- Roeper, T. and M. Siegel. (1978) “A Lexical Transformation for

- Verbal Compounds,” *Linguistic Inquiry* 9, 199-260.
- Selkirk, E. O. (1982) *The Syntax of Words*, MIT Press.
- Siegel, D. (1974) *Topics in English Morphology*, Ph.D. dissertation, MIT.
- 鷺尾龍一 (2001) 「受動態」、中島 (編) 所収、3-21.
- Wasow, T. (1977) “Transformations and the Lexicon,” in Culicover et. al. (eds), 327-360.
- Yang, I.-S. (ed.) (1982) *Linguistics in the Morning Calm: Selected Papers from SICOL-1981*, Hanshin.

辞書

- Cowie, A. P. (ed.) (1989) *Oxford Advanced Learner's Dictionary* (4th edition), Oxford University Press.

261-0014

千葉市美浜区若葉 1-4-1

神田外語大学

言語科学研究センター

*nkamiya@kanda.kuis.ac.jp*